

立ち入り  
向こう  
野太い  
ぎ声が  
こえる  
が

禁止の  
から  
喘聞  
んだ



俺が通う大学の近くに雑木林がある。

枝が伸び放題で鬱蒼とし、日中でも暗いから「立ち入り禁止」の看板が阻むまでもなく、ほとんど人は寄りつかない。

夜にしろ辺りに外灯がなく、より禍禍しさが増すとあり、だれも踏み  
いらぬのだが、そばを通ると喘ぎ声が聞こえるという。

男女がホテル代をケチって致すような場所であるまいし、しかも声は  
野太く、男むさい印象が。

そういう趣味でない野郎以外は気色わるがるだろうに、雑木林沿いの  
道を通りかかった男たちは次々と吸いこまれるように林へ。

「この噂がこわいのは、林に行った男たちが、その後どうなったか分かんないところなんだよ」

怪奇クラブの先輩に教えられ「あそこの雑木林にそんな噂が」と俺は目を真ん丸。

「俺のアパートは反対方向だから知らなかったです」

「まあ、一年前から喘ぎが聞こえるようになったというし、最近のとだからね」

「で？怪奇クラブとして取材、調査に行かないんですか？」

「……いや、だって俺はかわいい奥さんと愛しき子供のいる幸せな家庭を築きたいから。

万が一にも目覚めたくないし」

一応、林から生還した男たちの末路は知れないが、おおかた想像がつくということだろう。

俺もできるだけ健全な人生を送りたいとはいえ、好奇心のほうが優つてしまい。

お守りやお札などの「防霊グッズ」を携え夜中に林へ。

「立ち入り禁止」の看板を過ぎて踏みこむも野太い喘ぎは聞こえず。

懐中電灯で辺りを照らしながら適当にさ迷い歩いていると、そのうち仄かな明かりが目にとまり、足を向けると荒い息づかいが。

果たして辿りついたそこでは、下半身裸の男が草むらに仰向けになり、足をばっかーん。

「シャツをめくりあげて露わな胸の突起をいじりながら、股に大人のおもちゃを挟み「はあ、ああう、んああ・・・！」と野太い喘ぎと精液を垂れ流し。

俺にその気はないはずが、筋肉質な男が放つ、むせるような色香に当てられ目がくらくら。

つい近づこうとするも途中でとりだしたお守りを握り「な、なにやってんだよ！真壁！」と叫ぶ。

真壁は同級生でありスポーツ推薦で大学にはいったラグーマン。部活ではレギュラーで大活躍しているという。

「青田か・・・」と返事をしつつ、乳首を触り大人のおもちやを動かしたまま説明を。

喘ぎながらで聞きとりにくい内容の、おおよそは以下の通り。

スポーツ推薦で満を持してラグビー部に所属したものを、絶不調がつづき落ちこんでいた矢先。

林から「お前の潜在能力はすごい。俺なら本領発揮させてやれる」との声が聞こえたという。

誘われて林に踏みこみ、友人があとを追うもはぐれてしまい。そのうち見つけたのは男の幽霊。

「俺は生前、自分でも呆れるほどのヤリマンだな。」

若くして死んだから、まだまだやり足りない。

お前の体を貸してくれれば、とことん潜在能力を引きだしてやる。  
まあお前、エロの潜在もすごいんだけどさ」

「故郷に帰ろうか」とまで思いつめていた真壁は提案に乗ってしまい。  
探しにきた友人と・・・。

以降、この林で男に抱かれつづけ、部活では力を発揮できるように。  
一年にしてレギュラーになり、二年になった今では「お前がいれば優  
勝も夢でない！」と期待されるエースに。

「いや！だからって不特定多数の男とだなんて・・・！」と諭そうと  
するのに「お前だって」と膨らんだのを握られる。

踏んばっていたはずが、いつの間にか、真壁に覆いかぶさって。

欲情しきった顔で舌なめずりをし、しこしこされて全身が痺れるような快感。

「やめえ、やめて、くれえ・・・！」とは口だけで、上体を起して揺れる胸を両手で揉み揉み。

「はあ、真壁はあ、経験、ないのか・・・？あ、そう、乳首を、もつとお・・・！いい、いい、はああう！真壁の、固くてえ、きもちいい！」

俺と自分のを握って精液まみれにじゅぶじゅぶ！

乳首を弾いたら「んふうう！」と空イキしつつ、手に力を込めたに俺も「うう、くう・・・！」と盛大に射精。



ふだんは淡泊なほうだが、かなりの量を噴出しても、そそり立ったまま。

異常な性欲を持って余しつつ「このままじゃあ、やばい」と逃げようとするも、ラガーマンの怪力で押し倒され、馬乗りに

「くう、真壁！そいつは悪霊だ！きつとろくなことになる！」と懸命に訴えるも「だらだらお漏らしして説得力ゼロじゃねーか」と嘲笑。

温厚な真壁らしからず冷やややかな目で見下ろすに「お前が元凶か・・・と背筋を震わせる。

「これはお互い合意しての契約だからな。

こいつが契約を守る以上、俺もわるいようにはしねえよ」

にやにやしなながら、ゆっくりと腰を落とし艶めかしくゆらゆら。丸丸飲みこんだら深呼吸し、いじわるく笑って、跳ねるように腰を上  
下。

「ああ、いい！童貞ちゃんこも、おいしい、はあうう！」と笑いながら野太い喘ぎを響かせるも「はひい！だ、だめえ、ああ、ああ、ひあああ！」と俺も劣らない声量で甲高く。

「くく、いいねえ、俺が抱かれているのに、あんたが抱かれているみたい、かわいい顔して、幼気な声を漏らしちゃってえ、すっげ、すっげええ、興奮するう！ほら、ほらあ、もっと鳴きなあ！ホラーオタクの童貞くん！」

「やあ、やらあ、童貞、いうなああ！くうお、おお、おふうう！やめ、そんな早くう、でちやあ・・・！目、目を覚ませ、真壁、まか、ああ、らめえ、やらあ、おう、おおおん！」

すっかり快感に飲まれて、胸を押し返そうとしていた拳が地面に。指にも力がはいらず、手を広げると、ころがり落ちたお守り。

見やれば「安産祈願」。

「これじゃあ効かねえ！」と我ながら呆れたものを「お前それえ！」と悪霊は激昂。

『彼女とのエッチはつまらない』とぼやいていたくせに、女を妊娠させたのか！

くそおおお！前みたいに『子供ができたから』って俺を捨てるのか！

「くそくそくそお！」と叫びながら腰を上下しぎゅうぎゅうに絞めつけてくる。

たまらず「やああ、そんな強くうううう！」と腹の中にぶちまけてしまうも「まだだ、まだあああ！」と一滴ものこさず搾りとらんとばかりに犯されつづけて。

朝日がのぼるころ目を覚ませば、着衣の乱れなく、体もよごれてもいなく草地にころがつていた。

トラウマ級の無惨な悪夢だったのだから、すぐに忘れたいところ、そのあとずつと悶悶。

生々しい記憶が脳裏に刻まれ、時間が経っても薄れることなく。

熱病にかかったような日々を過ごし、その夜、耐えられずに、ふらふ

らとラグビー部の更衣室へ。

部活終わりで誰もいないはずが、扉を開けると椅子に座りふんぞり返った真壁が。

「抱かれることにしか興味なかったけど、お前のことは、骨の髄をしやぶるように、ぶち犯したいと思つたよ」

差しだされた手をぼうつと見て、ふらつきながら一步踏みだしてしまつた愚かな俺。

悪霊にとりつかれた友人に魅入られて肉欲に溺れるその末路は、きつと悲惨なれど、握る熱い手を振りはらうことはできなかつた。